

## 令和元年6月定例会 民主県民クラブ会派勉強会の概要

○目的 県政の重要な課題について、その問題点や方向性を明らかにし、今後の政策論議に役立てるために勉強会を開催する。

○日時 令和元年6月24日(月)  
14:30～16:00

○場所 松江地方気象台  
(松江市西津田7-1-11)

○出席者 須山会長、白石幹事長、  
平谷副幹事長、角政策調査会長、  
岩田政策調査副会長



○内容 観測露場及び現業室などの施設見学と「業務概要及び防災業務」の講義後、意見交換を行った。

### <挨拶 松江地方気象台 栗原台長>

- ・水害だけでなく地震など、大きな災害が多発している。
- ・昨年、気象庁は、国土交通省交通政策審議会気象分科会から「2030年の科学技術を見据えた気象業務のあり方」について、提言をいただいた。その中で、観測・予測精度向上のための技術開発、気象情報・データの利活用促進、これらを「車の両輪」とする防災対応・支援の推進について、利用者目線に立ち、社会的ニーズを踏まえた目指すべき水準に向けて、取組を進めるとする気象業務の方向性が示された。
- ・今後2～3年で、東部、西部、隠岐の地域を県、市町村、気象台でチームを作り、地域の防災力を上げる取組を進める。
- ・気象庁は、災害を起こるとそれを教訓に新たなより良い情報を出している。
- ・気象庁も予算・人も厳しい状況である。防災強化ということでご支援をお願いします。

### <施設見学 谷主任技術専門官>

- ・敷地内のソメイヨシノが標本木で、桜の開花を判断している。



- ・敷地内南側の装置で、湿度、温度、積雪、雨量等を計測している。
- ・室内では観測したデータが表示され、これを基に作業を行い、天気予報、警報・注意報及び気象情報注意報などを発表している。
- ・高層気象観測として、毎日 8 時 30 分と 20 時 30 分の 2 回、水素をつめたゴム気球に観測器材（GPS ゾンデ）をつけて飛揚し、上空約 30 k m までの気象（気圧、気温、湿度、風向・風速）の観測を行っている。松江を含む全国 16 か所の気象台・測候所で、実施。その時間に気象台を見たら、様子を確かめられる。ゴム気球の直径は、1.5m 程度で、上空では 7~8m。使い捨てで、1 つ約 3 万円。重さは、100 グラム程度で、拾った方に対し、ゴミとして処分するようメッセージを付けている。遠くは、東海・新潟方面まで飛んでいる。



## ＜講義「業務概要及び防災業務について」 高橋防災管理官、石原地域防災官＞

### 「業務概要について」

- ・気象庁は海上保安庁と同様に、国土交通省の外局。松江地方気象台は、全国に 50 ある地方気象台の 1 つ。
- ・昭和 13 年に松江測候所として事務を開始し、昭和 32 年に松江地方気象台に昇格。
- ・主な業務は、観測業務、予報業務、地震・津波・火山業務、防災気象業務など。

### 「防災業務について」

- ・気象庁気象台は、自然災害から国民の生命・財産を守るために、様々な取り組みを行っている。
- ・県・市町村との連携として、防災会議・防災訓練等に参画。また、気象台長自ら各市町村長と意見交換を行っている。今年度は、すでに 18 市町村を訪問し、明日 (6/25) の 1 市で全ての市町村の訪問を終える。特に、緊急時に気象台の持つ危機感を直接、気象台長自らが市町村長等に直接電話する、いわゆるホットラインを構築している。

- ・防災気象情報等の普及・啓発として、市町村、警察、消防などとの会議や連携した取り組みを実施。
- ・顕著な自然災害が発生した場合、被災地周辺の状況把握や現象の特定のために「気象庁機動調査班」による現地調査や地域防災支援の取り組みを実施。
- ・これからの県・市町村との連携強化として、各地域に「あなたの町の予報官」を配置し、平時から「顔の見える関係」を構築し、地域防災力の向上に貢献する。地域防災支援の具体例として、災害時の防災対応を疑似体験する「気象防災ワークショップ」を実施。
- ・防災気象情報を使いやすくする取り組みとして、土砂災害の「危険度分布」を5kmメッシュから1kmメッシュの情報に変更する改善を間もなく実施。
- ・防災気象情報をシンプルに伝えていく取り組みとして、5段階の警戒レベルを導入した。すでに実施しており、住民がとるべき行動と行動を促す情報の位置づけを行った。  
警戒レベル3は高齢者等の避難、警戒レベル4は避難と位置づけている。
- ・土砂災害の「危険度分布」は、気象庁のホームページからアクセスできる。

